

2005年12月7日 砂金採取の補償措置に関する現地での会合の問題点

(文責：FoE Japan 波多江秀枝)

1. 会合の概要

日時：2005年12月7日(水) 13:50~15:30(当初予定の13:30より遅れて開始)
(会合後、JBICがマニラに戻ることを理由に、会合は15:30までとされた。)

出席：SRPC 10名程度、NPC、農業省第1地方5名程度

TIMMAWA 代表者ら 10名程度

(TIMMAWA 副代表、サン・マニエル町メンバー、パンガシナン州学生関係者、
教会関係者の参加は、ダムサイトのゲートでSRPCによって拒否された。)

砂金採取の問題を話し合うスペシャル・タスク・フォース¹のその他のメンバー

- サン・ニコラス町長
- サン・ニコラス町評議員(農業問題担当者)
- サン・ニコラス町農業省担当

JBIC(環境審査室2名、営業部2名、マニラ事務所駐在員)

JBICの環境コンサルタント1名

FoEJ1名

主催：SRPC

SRPCによる挨拶(英語)

農業省第1地方担当官による「飼育プログラム」のプレゼンテーション(英語)

(パワーポイントで約1時間・配布資料なし)

- ・養牛と養ヤギについて、各々の利点・不利点等
- ・養牛に比べた養ヤギの有利性等

TIMMAWA 代表とサン・ニコラス町長がプレゼンテーションを中断

「時間も限られているし、話し合いをしたい」

オープン・ディスカッション(タスク・フォースの委員長である町長がファシリテーター)

各々の主な主張

・町長(英語)

タスク・フォースで3ヶ月くらい議論を重ねてきたが、現在、第1巡目 96 家族への養牛プログラム分 150 万ペソしか SRPC は用意していない。「999 家族全員」への生活再建プログラム提供のために、来年も引き続き資金が用意されるのか、この点の保障がほしい。

・SRPC(英語)

150万ペソで始め、その元金を増やしていくことで、「456 家族」に継続してアシストすることができるだろう。96 家族へのアシストは、2、3年で2倍、3倍と増えていく。

・TIMMAWA 代表(フィリピン語とイロカノ語)

「999」という数字も家族数。元々、TIMMAWA のサン・ニコラス町のメンバー(つまり、砂金採取者の個人数)は1395人だった。「456」家族というのは到底受け入れられない。

・サン・ニコラス町農業省担当(英語)

町長と同様の主張

¹ スペシャル・タスク・フォースは砂金採取者の生活再建プログラムについて話し合うため、2005年8月末に作られた。サン・ニコラス町長を委員長とし、SRPC、NPC、サン・ニコラス町評議員、サン・ニコラス町農業省、TIMMAWA 代表で構成される。設立以降、11月までに6~7回の話し合いが重ねられてきた。また、プログラムの第一巡目の対象者である96家族の選定作業も、スペシャル・タスク・フォースのメンバーが中心となり、10月に約1ヶ月をかけて行なわれてきた。

* 基本的には、こうした主張の言い合いで、「砂金採取者の認定・対象者数」については平行線

ディスカッションの締め

- ・サンニコラス町評議員（英語）
「999 家族」にプログラムを提供する必要がある。養ヤギの場合、どれくらいの資金・期間で、どれくらいの家族に提供することが可能か。
- ・農業省第 1 地方担当官（英語）
今日のデータを基に計算・計画していける。一緒にやっていきたい。
- ・TIMMAWA 代表（フィリピノ語とイロカノ語）
11 月には生活再建プログラムの具体的な実施計画を練る予定だったのに、結局、会合は開かれなかった。当初の計画では、10 月 28 日にすでに牛が 96 家族に提供されるはずだったのに、こうした遅延も不満。JBIC には、自分達のポジション・ペーパーを渡すので、読んでほしい。（ポジション・ペーパーを配布）
- ・SRPC
11 月は会合を調整しようとしたが、自分たちや町長、農業省第 1 地方担当官の都合が合わなかった。今日から 10 日間で実施計画を練って、TIMMAWA に提示できるようにしたい。

2. 今回の会合における、FoE Japan から見た事業者の主な問題点

これまでの一連の話し合いの過程・内容を無視し、事業者の提案する生活再建プログラムを一方的に押し付けようとした

（これまで「養牛」を第 1 巡の 96 人に提供するため、事業者を抜かしたスペシャル・タスクフォースのメンバーが各人の家々を回って、96 人の選定を行なうなど、かなりの労力が費やされてきた。にもかかわらず、7 日当日、事業者はいかに養牛より養ヤギのほうが低予算で利益が早くあがるか等、ヤギ・プログラムについてのプレゼンを農業専門家に依頼。サン・ニコラス町長と住民組織側が農業専門家のプレゼンテーションを静止するまで、約 1 時間も英語のプレゼンテーションが続いた。）

話し合いの重要なポイントである

- 砂金採取者の認定数（対象者数）
- 生活再建プログラムの予算確保

について、依然として合意が図られていないことが明らかになったにもかかわらず、十分な議論の時間もなく、そうした問題点はうやむやにされたままとなった。

（JBIC がマニラに発つ午後 3 時半までと、会合に時間制限（2 時間）があったなか、農業専門家のプレゼンテーションが約 1 時間も続いたため、肝心の話し合いの時間は 1 時間しかなかった。結局、砂金採取に関する議論も十分にできず、TIMMAWA が話したかったサンロケダムに関する他の問題点も議論する時間はなかった。）

	事業者	事業者以外のタスクフォース・メンバー
砂金採取者の認定数	456 家族	999 家族
プログラムの予算	150 万ペソを元金として増やしていく	150 万ペソは第一巡目 96 家族への資金。999 家族へのプログラム提供に十分な追加資金を用意する必要がある

通常の砂金採取に関するタスク・フォースでの会合は、事業者もフィリピノ語やイロカノ語で発言することが多いにもかかわらず、7 日の会合は、住民グループ側が理解しにくい英語でもっぱら行なわれ、住民組織の代表（Chairperson）以外の住民は発言しにくい環境だった。

（つまり、事業者である SRPC は、多分に JBIC の存在・評価を気にしていたと思われる。この点、「住民との話し合い」をするならば、フィリピノ語やイロカノ語で話し合いがなされるべきであった。仮に英語を使用するのであれば、英語を翻訳する時間が十分にとられるべきであった。）

住民組織 TIMMAWA の副代表を含む住民組織の関係者・NGO・教会関係者が話し合いへのオブザーバー参加を求めたが、『砂金採取者の補償の交渉』の部外者として、会合への参加をダムサイトのゲートで事業者に拒否された。

(もともと、住民グループ側は NGO・教会関係者が英語を現地語に翻訳してくれることを期待し、一緒に参加してくれるよう依頼していた。)

3. 今回の会合における、FoE Japan から見た JBIC の主な問題点と最低限必要な改善点

「同事業で影響を受けた砂金採取者への補償措置がうまく進んでいるか」把握するための努力を JBIC は怠っていた

- ・ 現地語から英語への通訳がなかったため（事業者も通訳せず）、JBIC が住民代表の発言内容をきちんとフォロー・把握できたか、非常に疑問。
- ・ 2時間という限られた会合時間のなかで、会合時間の半分にあたる1時間もの間、農業専門家のプレゼンテーションを聞くことが、JBIC の現地モニタリングに必要なだったとは思えない。
- ・ 通訳の体制が整っていなかったため、事業者が英語で話してしまう分、関係当事者間での有意義な話し合いの場を設定するという意味では、逆に JBIC の存在は阻害要因の一つともなっていた。

事業者に丸投げするのではなく、JBIC が主体性をもって会合のアレンジ、また、ファシリテートをするべきであった

- ・ 「事業者と住民グループが話し合う場」と、「JBIC が『現地で』地元の状況・問題をよりよく把握するために住民グループと話し合う場」を分けること
- ・ 現地語と英語が混ざること想定し、万全の通訳体制を整えること
(JBIC が現地語をしっかりとフォローできるよう、有能な通訳を用意し、現地住民が英語をしっかりとフォローできるよう、住民が信頼できる通訳の同行を許可する必要がある)
- ・ JBIC の現地調査・モニタリングの内容・評価・結果を、現地の住民も回覧できるよう、現地語、少なくとも、英語で公開すること

(参照)

FoE Japan から JBIC への「フィリピン・サンロケダム事業のモニタリングに関する要請書」(2004年8月5日付)

→ <http://www.FoEJapan.org/aid/jbic02/sr/letter/20040805.html>